

この三月に本校を卒業し、現在は予備校に通っている前新聞局長の税頭茂さんに、数学の受験勉強や本校での数学学習について意見を聞きました。

・現在の生活の様子と受験の目標を教えてください。

「予備校の授業数は数を絞り、自習室で自分に足りない部分に取り組むことを大事にしています。家でも時間のある限り勉強するようにしています。が、それでも一日あたり十時間くらいしか勉強できていません。目標は北海道大学。総合理系で受験します。」

・本校での数学の学習について、どのような感想を持っていますか。

「在学中はこういう学習が当たり前だと思って、疑問も持たなかったのですが、予備校での指導の他に、他校の出身者からいろいろ聞いたり、自分でも調べてみたりして、いろいろ気付くことがあります」

・気付いたこととは何でしょうか。

「北大の理系を狙うなら、授業進度より速く『青チャート』を一周して、生み出した時間で復習に時間をかけて理解を深めるか、『青チャート』より一段難しい参考書に取り組むべきだったということだ

す。本州の進学校では二年のうちに数Ⅲまで『青チャート』を終わらせ、三年ではさらに難しい参考書に取り組ませると聞いて驚きました。優秀な生徒の中には一年生の内に自分で数ⅡBCまで終わらせて数Ⅲに取り組んでいる生徒もいるそうです。もちろん、そういう生徒は東京大学などを目指しているわけですが、東大レベルに達しなかった生徒が北大を受けに来るので、そういう生徒がライバルだと考えると、勉強が甘かったと思います」

・それでは、本校の数学はもっと速くもっと難しくすべきだということですか。

「そうではありません。あくまで私の考えですが、難しさのレベルが、北大受験者には不足している、ほとんどの生徒にはやや難しすぎるのではないかと思っています。例えば全員に買わせている『青チャート』ですが、北大受験生ならやる必要があるのですが、それよりやさしい大学、例えば室蘭工大や道教育大などを狙っている人には、もう一段階やさしい『黄チャート』で十分ではないかと思うのです。ひょっとしたら、さらにやさしい『白チャート』や『スーパークイック』などでもいいかもしれません。逆に、本気で北大以上を目指す生徒には、一年次から別の指導が必要なのではないかと思ひます。在学中に、『青チャート』を終わらせて、『二対一対応の演習』や『プラチカ』に取り組ませるような指導があるとありがたかったと思います」

【記者 谷屋勇気】

数学が得意になるためにどのような工夫をしているか、在校生に聞いてみました。

一年生の後半から徐々に数学の成績が上がってきたという庵荘スーさん（Ⅱ―Ⅰ）は、一年生の前半ではひどい状態だったといひます。

「はじめの頃は勉強をサボりがちだったこともあって、そもそも授業について行けず、『4ステップ』の宿題を出されても、全く解けないどころか、解答を見ても理解できず、写経のように解答を丸写しして提出していました。

『青チャート』なんかは、あの分厚さを見ただけで絶望感に襲われるので、本棚の一番上で置物になっていました」

定期考査で赤点を取ったことをきっかけに、『5ステップ』がこれほひいい」

と想ひった庵荘さんは、親戚のお姉さんに週末に何度か数学を教えてもらうようになりまひた。そこで、わからなくなっひいた範囲を教えてもらひ、さらに『やさしい高校数学』という参考書も紹介してもらひました。平日でもその本を使いながら、教科書の例題だけでも理解できるようになろうと少しだけ努力を続けた結果、次の定期考査では赤点を免れたそうです。今ではクラスでも中間くらいの成績を取れるようになったとのことだす。

「私のように数学が苦手な人に、『4ステップ』や『青チャート』をやれといひても無理だと思ひうんです。私が使っている参考書は、見た目は青チャ並にいかつひんです、が、中身はメチャクチャやさしく書いてくれているので私でも理解できます。そういう参考書って他にいろいろあると親戚に教えてもらひました。学校の教材も、もっとやさしいのに変われば、みんなが喜ぶと思ひます」

【記者 出暮碧】

五月二十六日に行われた運動会で、全体的に進行が遅れ、終了時間が二時間も遅くなり、その後の部活動の時間に大きく影響した問題について取材し、反省点と今後の対策を生徒会執行部に聞いた。

その原因となつたのが『運動会サポートスタッフ』への応募が例年になく少なく、人集めに時間を浪費したこと、結局予定よりもかなり少ない人数で運営スタッフを構成しなければならなかつたことにあります。本校では、ボランティアの『運動会サポートスタッフ』が力を合わせて、出来るだけ先生に頼らず運動会を成功させるのが伝統です。特に、二・三年生には自分たちで行事を作る自覚を持っていたかなければ困ります」

また、体育委員長と共に運営の中心になつた生徒副会長・美庵良寛さん（Ⅱ―Ⅱ）は、「生徒会役員や体育委員以外に、運営スタッフには少なくとも三十人必要なのですが、当初『運動会サポートスタッフ』に応募してくれたのは九名でした。何度も追加募集を行ったのですが、最終的には二十名でやらざるを得ませんでした。選手の名確認や種目で使う道具の準備など、いくつも掛け持ちしなければならず、実際にやってみると大変な時間が掛かりました」と説明する。

【記者 茶布全】

秋の体育祭や来年の運動会に向けての対策について聞くと、渡会長は「今年よりもさらに早い段階からボランティアスタッフを募集し、参加してくれた人には何か特典を提供できないかと検討しています」と話す。

美庵副会長は「どのようになすればもっと多くの生徒がスタッフになってくれるのか、アンケートなどで情報を集め、執行部内で分析・検討したいと思ひます」と語つた。